



ゴーマークリレーはこうして生まれた

同志会の体育実践

全力で走ってもバトンはもらえる

1980年秋のことである。泉州南河内ブロック例会(当時は一つ)に向けて、難波高島屋近くの喫茶店で、淡さんと船さんと私が相談をしていた。船さんは同志会に入って間もなくのことだったが、次回の報告者の予定になっていた。その彼が、熱っぽく話した。

「子ども(当時4年生)に聞いたら、バトンをもらう方が思いっきり走ったら、前走者はバトンを渡されへんと思てる。これを(この考えを)変えなあかん。」

私はこれを聞いて、リレーで教えるべき中核となるのは、まさにこのことだと思った。「受け手は、全力で走り出しても、必ず渡し手からバトンをもらえる」ことをわからせることが、この教材の中核部分なのだ。同志会は、リレーの特質を「加速によるトップスピードでのバトンパス」とらえている。これを子ども側の言葉で言い表せばまさに前述のようになる。このことをわからせることができれば、授業は成功する。

スピード曲線と鬼ごっこ

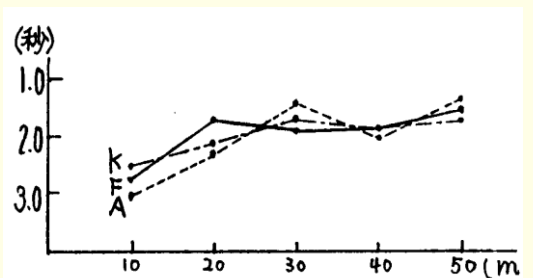
当時、大阪支部では年に一回、実践講座を開いていた。1981年の第3回目に私がリレーと短距離走を担当した。このときに、「鬼ごっこ」を提案する。実線の積み重ねのないほんの数行の提案だった。

スピード曲線を作らせて、スピードに全力で走っても、加速部分とトップスピードの部分があることを分からせようとする実践がなされたきた。学生にはこれがなかなかむずかしく、目に見えないのでわかりにくいところがある。

リレーで重要なのは、スタートダッシュからトップスピードにのるまで(小学生の場合10mほどで一定のスピードに達してしまうので、これを一応小学生のトップスピードとよぶ)他の区間より、約1秒余分にかかるということである。このために、スタートから全力で走っても(全力疾走)、トップスピードで走ってくる渡し手からバトンを受け取ることができる。

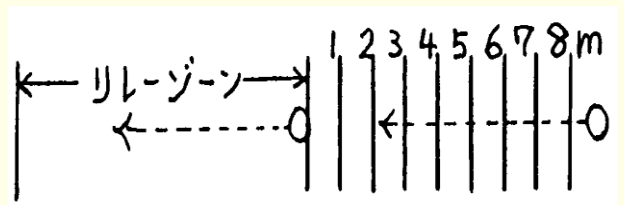
<私の提案は次のとおり>

- ・バトンなしで「鬼ごっこ」をする。タッチされないようににげる。1mに来たら逃げる。2mに来たら逃げる…というふうに距離をのばす。
- ・1~3mでは、全力でも必ず追いつくことがわかる。ぎりぎりのところが最適の距離だ。コンビは習熟まで固定しておく方がよい。



A男の場合

	10m	20m	30m	40m	50m
通過時間	3.0	5.2	6.7	8.7	10.2
所要時間	3.0	2.2	1.5	2.0	1.5



実践指導の科学化と蓄積

以上のことを経過する一方で、浪さんが1982年広島大会走分科会を契機に実践を深め、その実践を冬大会に提案する。ここで、ゴーマークリレーが科学的にも実践的にも裏打ちされる形で提案され、誕生したと言えるだろう。浪さんによると、「ゴーマーク」という言葉は、トム・エッカー著「種目別最新技術」BM社にあり、アメリカでは使われていたそうである。岡さんが4~7月に浪実践をトレースする形で実践し、第33次日教組教研ヘレポートする。浪氏の実践は84年「たのスポ」10月号にたのスポ最長の50ページに掲載されている。最新は「たのしい・体育シリーズ・陸上運動走る」のリレー実践に集約されている。